

外国語科英語

中学校第3学年について

目次

I 研究の目的	189
II 研究の内容と方法	189
III 研究の結果とその考察	189
1 発音問題 (その1) ペーパーテストについて	189
2 発音問題 (その2) Aural Perception Test について	193
3 くぎりの問題	198
breath group, sense group, sense unit について	
4 書く問題	
否定, 受身, 疑問のかたちへの書きかえについて	201

I 研究の目的

全国学力調査の結果をもとにして、さらにその一部を深く掘り下げ、諸データを分析し、英語指導上の欠陥を見つけて、指導の参考に供しようとするものである。本稿では、発音と書く力の二つの面に特に注意を向けた。発音に関しては、ペーパーテストをとおして、読めるかどうかを見、さらに聴覚テスト (Aural Perception Test) を実施して、音の聞きわけの際の困難点を浮きぼりにしてみたいと考えた。また、書く力については、全国学力調査の問題が選択肢法であるのを、実際に書き換えさせ、問題も易しいものから、むずかしいものを各4問ずつ実施して、どの程度生徒たちが理解しているか、どういう誤りがあるかを明らかにしようと試みた。対象となった生徒は100名である。

Ⅱ 研究の方法と内容

全国学力調査問題のうち、発音、くぎり、文強勢、長文読解、書き換えの問題をとりあげ、類似した問題を作製し、全国学力調査をうけた同じ100名の生徒に、テストを実施した。発音の面では、これに、ロバート・ラドー (Robert Lado) の「日本人学生のための英語聴覚テスト」 ("Test of Aural Perception in English for Japanese Students")などを参考にして、問題を作成し、前新潟アメリカ文化センター館長のアッシュフォード氏 (Mr. T. Ashford) のご好意でNatural Speedで録音テープに吹きこんでいただいたものを利用して、聴覚テストを加えた。本来ならば、直接氏に行なっていただくべきであったが、氏の多忙に加えて、試験会場が3か所にわかれたので、やむをえず録音テープを使用した。

書く力の面では、一般疑問文、否定文、受身文についてそれぞれやさしいものからむずかしいものを各4問ずつ用意して、実際に書き換えをやってもらった。中には、中学生には少しむずかしいかと思われるものもはいつている。

なお、紙面の都合で、文強勢と長文読解は割愛した。

Ⅲ 研究の結果とその考察

1 発音問題 (その1) ペーパーテストについて

調查問題

次の1, 2, 3の()内に示した単語の下線をひいた部分の発音を含む単語を、右側に示した文中の
ア、イ、ウ、エ、オの中から一つずつ選んで、解答用紙のその記号を○で囲みなさい。

- 1 (pens) She likes to see her brother's picture books.
ア イ ウ エ オ
- 2 (cold) The boy could not open the box.
ア イ ウ エ オ
- 3 (think) Tom and Mary went there with their father and
mother last month.
エ オ

分析的問題

次の1, 2, 3, 4, 5の各群の中に, 下線の部分の発音が, 他の語と異なるものが, それぞれ一つずつあります。解答用紙のその記号を○で囲みなさい。

1	ア	note	イ	dog	ウ	open	エ	home	オ	hope
2	ア	walk	イ	call	ウ	boat	エ	ball	オ	bought
3	ア	sings	イ	likes	ウ	thinks	エ	looks	オ	sinks
4	ア	good	イ	look	ウ	book	エ	pool	オ	foot
5	ア	set	イ	men	ウ	bed	エ	head	オ	have

表1. 調査問題と分析的問題の応答分布

		ア	イ	ウ	エ	オ	無答	平均
調査問題	(1) [z]	2	7	5	73	12	1	54
	(2) [ou]	27	21	14	21	17	0	
	(3) [θ]	15	9	5	3	67	1	
分析的問題	(1) [ɔ]	17	44	8	10	21	0	49
	(2) [ou]	27	9	20	10	32	2	
	(3) [z]	73	8	8	3	8	0	
	(4) [u:]	11	3	6	60	19	1	
	(5) [ʌ]	10	10	9	31	57	3	

表2. 調査問題と分析的問題の正答率との関連

	調査問題					
分析的問題	正答数	3	2	1	0	計
	5	2	3	1	0	6
	4	5	10	2	0	17
	3	3	9	6	0	18
	2	2	15	11	3	31
	1	1	7	5	6	19
	0	0	2	4	3	9
	計	13	46	29	12	100

○印は正答, 数字は応答率 (%)

発音の問題は調音と聴取の二つの面から考える必要がある。調音を調べるにはいちいち実際に聞くことがいちばん確実であるが, そういうテストをすることは方法的に無理がある。聴取のテストは実際に音をきかせて, その反応を見ればよい。しかしこれもくふうがいることである。ところで, ペーパーテストではかることは, 文字を正しく読めるかどうかということであるが, この面は頭で知ってさえおれば, ペーパーテストには正答を与えられるのであるから, そのことが必ずしも発音が正しくできるとか, 正しく聞きとれるということにはならない。この点をじゅうぶん考慮にいれて問題を考えなければならない。

(1) [z] と [s]

調査問題1ではpensの[z]が読めて, これと同じ発音をするbrother'sを選ぶもので, 正答率は73%であった。分析的問題3では動詞の三人称単数現在の-sが正しく読めるかどうかをみようとしたもので, 正答はアのsingsで, 正答率は73%であった。どちらの問題もできたものが59%で, どちらか一方ができたものが28%であった。練習をとおして, 所有格の's, 名詞の複数の-s, 動詞の三人称単数現在の-sの発音を確実につかませることがたいせつである。又一つ一つの単語の発音も正確に覚えさせることがたいせつで, 誤った発音を覚えこんでしまうと, 矯正するのがたいへんである。

(2) [ou] と [ɔ:] と [ɔ]

調査問題2ではcoldの[ou]が読めて、openを選ぶもので、正答率は21%、分析的問題2でも[ou]と[ɔ:]の区別の正答率は20%ときわめて低い。分析的問題1の[ou]と[ɔ]の区別の場合も44%と低い。三つの問題を比較してみると、三つともできたものわずか4%、二つできたもの20%、一つできたもの34%となった。

新潟県人は長岡の一部の老人を除いて「オウ」という音が非常にむずかしく、たいてい「オー」でまにあわせている。この事実が大きく影響していると思われる。調査問題でboy、分析的問題ではwalk, boughtを選んでいものが比較的多いことはこのことを示しているといえよう。

[ɔ]と[ou]の区別は[ɔ:]と[ou]の区別ほどにはむずかしくない。それにしても、[ou][ɔ:] [ɔ]の区別は、単語や文をとおして練習して、身につけさせる必要がある。

Aural Perception Testの結果をあわせて考えてみよう。

このテストでは[ɔ:]と[ou]の区別は単語と文の場合とではそれぞれ84%と67%の正答率であり、[ɔ]と[ou]の区別はそれぞれ93%と72%となった。(なおアッシュフォード氏の[ɔ]の発音は[ɔ]ではなくて、[a]であった。) ペーパーテストとの結果と比較してみると次の表ようになる。ペーパーテストで全然できなかったもの44%中42%はAural Perception Testでは二つ以上の正答であり、四つ全部できたものが17%もあることは興味深い。聴覚だけをとりえて考えれば、大部分は訓練しただけでかなりよくなることがじゅうぶん察せられる。文字と関連づけて意識的にじゅうぶんに練習する必要がある。

表3.

	Aural perception Test						
ペーパーテスト	正答数	4	3	2	1	0	計
	3	2	2	0	0	0	4
	2	10	8	3	0	0	21
	1	15	10	4	2	0	31
	0	17	15	10	1	1	44
	計	44	35	17	3	1	100

(備考) Aural Perception Testの問題は次のとおり。

- | | | | |
|------|--------|------|-----------------------|
| 1. { | bought | 2. { | He bought a new ball. |
| | bought | | He bought a new ball. |
| | boat | | He bought a new bowl. |
| 2. { | hop | 4. { | I want work. |
| | hope | | I won't work. |
| | hop | | I want work. |

(3) [θ] と [ʃ]

調査問題3ではthinkの[θ]が読めて、monthを選ぶのであるが、67%の正答率であった。この問題はth-を正確に読めるかどうかをみる問題である。文字から判断すれば、thを[s]とか[z]と誤ることはありえない。thの発音は[θ]か[ʃ]しかないからである。ただこの音が日本語にないため正確に[θ]なり[ʃ]の発音や聴取ができるかどうかは、観念的に知っているということとは別問題である。筆者の経験では、英語が非常に好きで、読解力もある生徒が、具体的に発音を習っていなかつたばかりに、聴取も発音もできなかった例をみている。じゅうぶんに訓練する必要がある。又[θ]と[ʃ]の区別では、一つ一つ単語を確実に覚えこませることがたいせつである。

Aural Perception Testにあらわれた[s]と[θ]および[z]と[ʃ]の関係を

参考までに、こゝにのせてみると、〔s〕と〔θ〕の区別は単語と文ではそれぞれ63%と83%、〔θ〕と〔z〕ではそれぞれ63%と52%であった。〔s〕〔θ〕〔z〕〔θ〕の識別を四つとも全部できたものはわずかに4%、〔θ〕と〔s〕の両方ともできたもの23%、〔θ〕と〔z〕では両方できたもの15%と非常に少なかった。Minimal pairs techniqueをつかって徹底させることがたいせつである。

ただし、Aural Perception Testの問題は次のとおりである。

1. $\begin{cases} \text{sing} \\ \text{thing} \\ \text{thing} \end{cases}$ 2. $\begin{cases} \text{I can't sink here.} \\ \text{I can't think here.} \\ \text{I can't think here.} \end{cases}$ 3. $\begin{cases} \text{clothing} \\ \text{clothing} \\ \text{closing} \end{cases}$
4. $\begin{cases} \text{He is teething.} \\ \text{He is teething.} \\ \text{He is teasing.} \end{cases}$

(4) 〔u:] と 〔u〕

分析の問題4で取りあげてみたが、正答はpoolで60%の正答率があった。〔u:] と 〔u〕の発音にあっては、たいせつなのはこれらの相違が音の長短にはなくて、それぞれ異質のものであるという点にある。英語の〔u:]〔u〕は口唇を丸くしなければならないので、この点をじゅうぶんに注意して練習させる必要がある。

参考までに次にAural Perception Testの結果ものせておくと、単語のできたもの46%、文のできたもの48%、両方できたもの42%であった。ペーパーテストとの関係は右の表のとおりで、ペーパーテストもAural Perception Testも両方全部できたものはわずか29%しかない。他の場合もそうであるが、ペーパーテストとAural Perception Testの結果とはあまり相関性がない。いいかえると録音テープなりレコードなりによる訓練、またminimal pairs techniqueなどを利用しての、発音練習がじゅうぶんなされていないということであろう。発音を感覚的に具体的にとらえさせることが必要である。

表 4.

ペーパー テスト	Aural Perception Test				
	正 答 数	2	1	0	計
	1	29	26	4	59
	0	13	22	6	41
	計	42	48	10	100

(備考) Aural Perception Testの問題は次のとおり。

1. $\begin{cases} \text{pull} \\ \text{pool} \\ \text{pull} \end{cases}$ 2. $\begin{cases} \text{I don't like this soot.} \\ \text{I don't like this suit.} \\ \text{I don't like this soot.} \end{cases}$

(5) 〔e〕 と 〔æ〕

分析の問題5では〔e〕と〔æ〕の区別の問題であるが、正答はオで正答率は38%と低い。〔æ〕はとかく日本人にとっては、日本語の「エ」にひきつけられる可能性がある。たとえばhaveは〔hæv〕でなくて、〔hev〕となり、どんな所にでてきても〔hev〕とやる生徒が多い。正答率の低いことはこのことを実証していると思われる。いったん誤って覚えこむと、矯正す

るのがたいへんであるから、始めから注意を払って教える必要がある。

Aural Perception Testの結果とペーパーテストの結果との関連は表5のようになる。両方でできたものわずか12%と非常に少ない。ペーパーテストが0でAural Perception Testが2あるいは1のもの、それぞれ13%、31%となっていて、関連性はあまりない。

表5.

ペーパーテスト	Aural Perception Test				
	正 答 数	2	1	0	計
	1	12	21	5	38
	0	13	31	18	62
	計	25	52	23	100

(備考) Aural Perception Testの問題は次のとおり。

1. { men 2. { Give me a pen.
 { man { Give me a pan.
 { men { Give me a pen.

2 発音問題 (その2) Aural Perception Testについて

分析的問題

この問題は「聞きわけ」の力をためす問題です。1番から17番までは単語について、18番から36番までは文について行ないます。各問題はそれぞれ三つずつ組になっていて、その中から他の二つと違う発音のものを選び出してください。答は解答欄の該当する所に○印をつけてください。

- 例題1. イ heat 例題2. イ This cot is big.
 □ hit □ This cot is big.
 ハ hit ハ This coat is big.
1. イ leave 18. イ He beat his dog.
 □ live □ He bit his dog.
 ハ live ハ He bit his dog.
2. イ knit 19. イ I don't like this pin.
 □ knit □ I don't like this pin.
 ハ net ハ I don't like this pen.
3. イ men 20. イ Give me a pen.
 □ man □ Give me a pan.
 ハ men ハ Give me a pen.
4. イ wait 21. イ I have a date.
 □ wet □ I have a debt.
 ハ wet ハ I have a debt.

解答欄 (○印は正答を示す。)

- 例題1. ①ロハ 例題2. イロ○
1. ①ロハ 18. ①ロハ
 2. イロ○ 19. イロ○
 3. イ○ハ 20. イ○ハ
 4. ①ロハ 21. ①ログ
 5. イ○ハ 22. イ○ハ
 6. イ○ハ 23. イ○ハ
 7. ①ロハ 24. ①ロハ
 8. イ○ハ 25. イ○ハ
 9. イロ○ 26. イロ○
 10. イ○ハ 27. イ○ハ
 11. イ○ハ 28. イ○ハ
 12. ①ロハ 29. ①ロハ
 13. イロ○ 30. イロ○
 14. イ○ハ 31. イ○ハ
 15. ①ロハ 32. ①ロハ
 16. イ○ハ 33. イ○ハ
 17. ①ロハ 34. ①ロハ
 35. ①ロハ
 36. イロ○

(注) アッシュフォード氏の

例題2の cot, 8番の hot,
 25番の dock, 10番の hop

- | | |
|----------------|-------------------------------|
| 5. イ bird | 22. イ She looks at the girl. |
| □ bud | □ She looks at the gull. |
| ハ bird | ハ She looks at the girl. |
| 6. イ heard | 23. イ He is a person. |
| □ hard | □ He is a parson. |
| ハ heard | ハ He is a person. |
| 7. イ cat | 24. イ This hat is good. |
| □ cut | □ This hut is good. |
| ハ cut | ハ This hut is good. |
| 8. イ hut | 25. イ Look at the duck. |
| □ hot | □ Look at the dock. |
| ハ hut | ハ Look at the duck. |
| 9. イ bought | 26. イ He bought a new ball. |
| □ bought | □ He bought a new ball. |
| ハ boat | ハ He bought a new bowl. |
| 10. イ hop | 27. イ I want work. |
| □ hope | □ I won't work. |
| ハ hop | ハ I want work. |
| 11. イ pull | 28. イ I don't like this soot. |
| □ pool | □ I don't like this suit. |
| ハ pull | ハ I don't like this soot. |
| 12. イ sing | 29. イ I can't sink here. |
| □ thing | □ I can't think here. |
| ハ thing | ハ I can't think here. |
| 13. イ clothing | 30. イ He is teething. |
| □ clothing | □ He is teething. |
| ハ closing | ハ He is teasing. |

27番のwantの中のそれぞれの〔ɔ〕の発音は、むしろ〔a〕に近かった。

14. イ rice	31. イ This is right.
□ lice	□ This is light.
ハ rice	ハ This is right.
15. イ very	32. イ Voting is interesting.
□ berry	□ Boating is interesting.
ハ berry	ハ Boating is interesting.
16. イ feet	33. イ This fall is wonderful.
□ heat	□ This hall is wonderful.
ハ feet	ハ This fall is wonderful.
17. イ she	34. イ He takes a ship.
□ see	□ He takes a sip.
ハ see	ハ He takes a sip.
	35. イ It wasn't so low.
	□ It wasn't slow.
	ハ It wasn't slow.
	36. イ We always passed.
	□ We always passed.
	ハ We always pass it.

表6. Aural Perception Testの正答率

番 号	1	18	2	19	3	20	4	21	5	22	6	23	7	24	8	25
正 答 率 (%)	91	61	75	69	64	37	87	61	90	56	91	67	92	86	14	28
単語と文の各組合 わせ完全正答率(%)	56		53		25		54		53		62		81		5	
備 考	[i:] - [i]		[i] - [e]		[e] - [æ]		[ei] - [e]		[ə:] - [ʌ]		[ə:] - [ɑ:]		[æ] - [ʌ]		[ʌ] - [ɑ]	

9	26	10	27	11	28	12	29	13	30	14	31	15	32	16	33	17	34	35	36
84	67	93	72	86	48	40	60	30	42	23	21	40	52	21	20	53	47	54	93
57		69		43		23		15		7		19		4		25		53	
[ɔ:] - [ou]		[a] - [ou]		[u] - [u:]		[s] - [θ]		[z] - [ʒ]		[r] - [l]		[b] - [v]		[f] - [h]		[ʃ] - [ʒ]		juncture の問題	

ここで行なった調査は音の違いをきき分けられるかどうかを調べたものであって、この結果から、すぐに「この発音がききとれるのだから、意味もわかる」とはならない。練習をとおして、少しでもそうなるようにするのが英語教師の役目であろう。そのためには教師の方でじゅうぶんに生徒の困難点を理解する必要がある、その困難点がどこからきているかを検討し、よく指導することがたいせつである。

表6から見ると、単語だけを取りあげた場合、[i:]と[i], [ɔ:]と[ʌ], [ɔ:]と[a:], [æ]と[ʌ], [a]と[ou]はそれぞれ90%以上の好成績をあげている。ついで[e i]と[e], [ɔ:]と[ou], [u:]と[u]が80%以上とよい成績であったが、母音では[ʌ]と[a]がよくなかった。母音の[a]はあるいは教室で練習しない、耳新しい音で、とまどってこういう結果になったのかもしれない。もしこれが[a]でなくて[ɔ]であったらもっとよかったであろう。それにしても[ʌ]と[a]の区別がこんなにもできないものが多いのは意外であった。

子音の方は、こゝで取り上げた[s]と[θ], [z]と[ʒ], [r]と[l], [b]と[v], [f]と[h], [s]と[ʃ]はどれもよくない。これらの子音はいずれも日本人の苦手とする音であるが、筆者の経験では、少しドリルをやれば、かなりよくなるもので、じゅうぶんに練習させてほしいものである。

ところで、文の方を見ると、単語より結果がよくないことは、当然推測されるところであるが、それにしても[ʌ]と[a]が28%にあがっているのと、[æ]と[ʌ]が86%となっているのを除いては、母音では全体に大巾に成績がさがりすぎている。子音では[s]と[θ], [z]と[ʒ], [b]と[v]がそれぞれよくなっているが、到底満足すべきものではない。

まして、単語と文との各組合わせの完全正答率を調べてみると[æ]と[ʌ]の81%を除いて、いずれも大いに練習の必要を痛感させられる。特に[e]と[æ]の25%, [s]と[θ]の23%, [z]と[ʒ]の15%, [r]と[l]の7%, [b]と[v]の19%, [f]と[h]の4%, [s]と[ʃ]の25%等は、録音テープやレコードを利用し、minimal pairs techniqueによる練習で徹底する必要がある。発音のしかただけではいけないのであって、実際に発音させ、耳できかせて、具体的につかませることがたいせつである。なお[ʌ]と[a]の5%についても、[a]は米音だから、やる必要はないというのではなく、特に新潟県内ではむしろアメリカ人と接することのほうが多いのであるから、きく耳くらいはもたせることが必要であろう。

Junctureの問題ではslowとso lowの区別およびpassedとpass itの区別ができるかどうかであったが、passed [pa:st]とpass it [pa:s it]はpass itがテープにあまりにもはっきりはいっているので、できて当然であった。Junctureはききとる際に非常に大切なものであることはいうまでもない。

表7. ペーパーテストとAural Perception Testの正答数の関係

		Aural Perception Test																													
		28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	計
ペーパー テスト	8						1	1																							4
	7	1	1			1	2		1	1	1																				8
	6				1		1	2	2	3	1	1		1	1	1															14
	5			1		1	1	2	2	1	2	2	1																		13
	4				1		3	3	1	4	3	1	4		1		1														22
	3		1					3	2	2	2	4	2	1			1														18
	2				1		1	2	1	1		2	1			1															10
	1					1			1		2	1			2			1	1										1		10
	0						1						1						1												3
計		1	2	1	3	3	10	12	11	12	11	11	9	2	4	2	2	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		100

表8. ペーパーテストの正答数とAural Perception Testの完全正答組数の関係

		Aural Perception Test														
		13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	計
ペーパー テスト	8						1	1								2
	7		2			3		1	1		1					8
	6					3	3	3	2		1	1	1			14
	5		1		1		3	4	1	2	1					13
	4				2	4	5	1	1	5	4					22
	3		1			1	2	3	4	5		1	1			18
	2				1			5	2	1			1			10
	1					1		1	2	1	1	1	1	1	1	10
	0							1		1					1	3
計		0	4	0	4	12	14	20	13	15	8	3	4	1	2	100

(注) 組とは語と文の対応した組合わせをさす。

次にペーパーテストの結果と合わせて、個人別に見てみると上の表7、表8のようになる。

こうしてみると、ペーパーテストの結果とAural Perception Testの結果の間には相関はあまりみられない。このことは音識別と spelling の関係が相関を欠いているということであって、音識別ができるからといってそれが、spelling をみてすぐ読めるとか、きいてすぐ、spelling と結びつけて考えられるということにはならないのであって、また spelling をみてすぐその発音ができるとか、その発音をきいてわかるということに結びついてはいかないのである。このことは明かにドリルの不足をものがたるものであって、徹底したドリルをとおして、生徒が耳で聞き分けられる音と spelling の関係をしっかりつかまえられるように指導してほしいものである。

発音指導にあたっては、教師自身が英語の sound system と日本語の sound system を比

較して、およその日本人が英語学習にあたっての困難点を予測し、そして教室にあってはさらに個々の具体的な事例に応じた指導をしなければならない。行きあたりぼったりの発音指導であってはならないことはいうまでもないことであり、また、授業をとおしてたえず生徒の発音に注意し、そのつど訓練していくことがたいせつである。その場合、生徒に示す teacher's model pronunciation においては、教師自身、たえざる練習をとおして、できるだけ phonetically accurate sound を示すべきであり、生徒の発音に対しては、phonetically accurate に近ければ近いほどよいけれども、phonemically accurate であればよいとする寛容がほしい。もちろん一度覚えこんだものを矯正することは、初めて覚えこませるよりもむずかしいことであって、できるだけ正確に覚えこませることが必要なことはいうまでもない。同時に個々の発音だけでなく、一連の発音環境の中の発音、すなわち、広い意味での intonation を加えた文の中での発音をつかませることはいっそうたいせつであって、そういう面での production と reception のじゅうぶんな練習が望まれる。そしてわれわれは誰もが経験するところであるが、一人の人の発音にだけ慣れてしまうと、少しでも違った発音をきくと、もうわからなくなることがあるが、録音テープ、レコード、ラジオ、テレビによって、種々の発音に慣れさせ、phonemically the same sounds をしっかりとらえさせねばならない。

3 くぎりの問題

調査問題

次の1, 2, 3の文を、1か所だけ、くぎって読むとすれば、どこでくぎりますか。くぎるところを、ア、イ、ウ、エ、オの中から一つずつ選んで、解答用紙のその記号を○で囲みなさい。

- 1 We are going to play baseball next Sunday.
ア イ ウ エ オ
- 2 I do not think that it will be fine tomorrow.
ア イ ウ エ オ
- 3 All the boys and girls of this school are very kind.
ア イ ウ エ オ

分析的問題

次の1, 2, 3, 4, 5の文を、1か所だけくぎって読むとすれば、どこでくぎりますか。くぎる所をア、イ、ウ、エ、オの中から一つずつ選んで、解答用紙のその記号を○で囲みなさい。

- 1 After the ball game we had some tea.
ア イ ウ エ オ

2 He comes to school with us every day.

ア イ ウ エ オ

3 The capital of the United States of America is Washington.

ア イ ウ エ オ

4 The best thing to do now is to start at once.

ア イ ウ エ オ

5 The first man that I saw there was Mr. Smith.

ア イ ウ エ オ

表 9. 調査問題と分析的問題についての応答分析

		ア	イ	ウ	エ	オ	無答	平均
調査問題	1	2	13	7	(77)	0	1	57
	2	2	(60)	28	8	2	0	
	3	21	3	37	(34)	5	0	
分析的問題	1	5	4	(85)	3	2	1	39
	2	5	6	60	1	(31)	0	
	3	17	7	28	(41)	5	2	
	4	23	24	(29)	7	15	3	
	5	76	3	3	(10)	6	2	

○印は正答

数字は応答率(%)

表 10. 両問題の正答数の関係

		調 査 問 題				
分 析 的 問 題	正答数	3	2	1	0	計
	5	1	0	0	0	1
	4	5	3	3	0	11
	3	3	11	3	2	19
	2	3	12	5	2	22
	1	2	19	17	3	41
	0	1	2	2	1	6
	計	15	47	30	8	100

くぎりというのは文法関係を明らかにして、意味を相手にはっきり伝えるために音を一時的に休止させることをいう。そしてこのような文法的休止二つの間の音の連続を特に sense group ということがある。両方の問題をとおして、正答率は低い。分析的問題 1 および調査問題 1 と 2 を除いては問題にならない。とかく生徒は一語一語きって読みがちであるが、chorus reading や individual reading でたえず注意して、breath group をつかませる必要がある。breath group がつかめていないということは文の構造がつかめていないことでもあるから、単に読めばよいというのではなくて、sense unit をとらえて読む読み方をつかませることがたいせつである。

① 分析的問題 1 では after the ball game が一つの sense unit をなし、このあとできれるわけであるが、正答率は 85 % と高い。文頭にある after などに導かれる句はよくつかまられていると思われる。

② 調査問題 1 と分析的問題 2 では be going to ~ と play baseball はよく練習されて知っているからであろうか、調査問題では正答率が 77 % と比較的よいが、分析的問題では comes to school はまもったものとしてよく知っているのであろうか、正答率は 31 % とよくなかった。これは録音テープやレコードで、読みの練習のときに、breath group ごとによって行なうが、よく、He comes to school と with us と every day ときるからではないだろうか。誤答ウが多かったのはこのことを示しているように思われる。これは、文全体をとおし

ての構成要素のは握がじゅうぶんでないことを示している。Friesによれば、英語の文はいくつかの構造の層 (layers of structure) から成り立っていて、どの層も普通二つの直接構成要素 (immediate constituents) から成り立っている。この原則に従って文を分析していけば二つの直接構成要素からなるいくつかの修飾層から成立することがわかり、文の構造が理解しやすくなる。したがってこのI-C分析はまた breath groupを見つけるのにも役立つのであって、上の文の場合1か所できるとすれば、ウできるよりもオできるほうが妥当であることがよくわかるのである。しかし直接構成要素分析 (I-C分析) と breath groupが必ずしも全部一致するとは限らないので、その点 breath groupに関する規則などを参考にして徹底をはからなければならない。

- ③ 調査問題2ではイが正答で60%の正答率を得ている。次いで誤答ウが多いのは、注意しなければならない。会話などの場合、I think that といって、くぎってしまうことは多いが、これは次にくる言葉を考えているためであって、普通は接続詞と従位節の間はくぎってはならないのである。生徒はthatはよく知っているため、thatまでいっきに読んでしまいがちであるからじゅうぶんに注意しなければならない。
- ④ 調査問題3と分析的問題3ではそれぞれ34%、41%という正答率であった。長い主部がきた場合、そのすぐあとにくぎりがくるのであるが、正答率は低かった。それぞれの誤答のウ、ア、ウを見てみると、前置詞の前に pause がきていて、小さい sense group はよくつかんでいるが、さらに大きい構造の層がつかめていないことを示している。生徒は少し複雑になるとわからなくなる。I-C分析等はこの場合、有効であるから、利用して徹底をはからねばならない。

⑤ 分析的問題4と5

分析的問題は番号を追っていくにしたがって複雑になっているので、正答率が下がっていくのは当然考えられることであるが、それにしても29%と10%は低すぎる。これは修飾構造がよくつかめていないからに他ならない。4ではア、イ、オの誤答が多いのは小さい sense group はよくは握しているが、より大きい sense unit はつかめていないことを示している。5についても同じことがいえ、誤答アが多かったのは推察されるが、この文の場合はそれよりもさらに大きい構造の層があるのであって、これがつかまれないといけないわけである。こういう文章は三年生にもなれば関係代名詞構文としてよく出てくるので、じゅうぶんにこうした修飾構造はつかまれないといけない。I-C分析や substitution drill が有効である。

⑥ Aural Perception Test の Juncture と ペーパーテストの関係について。

問題は次のとおりである。

35 { It wasn't so low. It wasn't slow. It wasn't slow.	36 { We always passed. We always passed. We always pass it.
--	---

正答率はそれぞれ54%と93%であった。もっとも36番の場合は非常にはっきりしていたので、耳が正常であるなら、必ず正答できるといっても、過言ではない。又35番にしても、かなりはっきりしていたので、54%の正答率は低すぎると思われる。文を読むときに、Junctureはたいせつなものであって、じゅうぶんに指導する必要がある。筆者は以前、全然きかせたことのない英文を natural speed できかせて書きとらせたことがあったが、結果は全然問題にならなかった。たとえば He went to Paris when he was a boy. /hi wentə pæris | hweni wəzə bɔi/ では「ホエニウザ」(when he was a) はどんな単語(?)かと錯覚をおこすようなわけである。きき取り練習がいかに大切かを痛感した次第であった。またフルブライト交換教官として新潟大学教育学部附属中学校に来られた Mr. Matsueda が、一つ一つの発音も大切であるが、hearing の練習はもっとたいせつだといわれたのを覚えている。an aim なのか a name なのか、きいて区別できなければ致し方がない。Assimilation も考慮にいれて、指導がなされることが望まれる。

ペーパーテストとAural Perception Test の正答数の関係は次のとおりである。

表 11

	正 答 数	ペ ー パ ー テ ス ト								
		8	7	6	5	4	3	2	1	0 計
オセ ス ー プ ト ラ シ ョ ン ・ ン バ ・ ー テ	2	0	4	3	10	10	11	12	3	0 53
	1	1	1	3	6	6	14	7	1	0 39
	0	0	0	0	3	0	2	2	1	0 8
	計	1	5	6	19	16	27	21	5	0 100

4 書く問題

調 査 問 題

次の1, 2, 3の文をもとにして, [] 内のさしずにしたがって文を書かせたら, ア, イ, ウ, エ, オの五とおりができました。ア, イ, ウ, エ, オの中から, それぞれ正しい文を一つずつ選んで, 解答用紙のその記号を○で囲みなさい。

1 She wrote a letter last Sunday.

[「……しなかった。」という過去の否定の文に書きかえよ。]

ア She wrote not a letter last Sunday.

イ She did not writes a letter last Sunday.

ウ She was not write a letter last Sunday.

エ She did not wrote a letter last Sunday.

オ She did not write a letter last Sunday.

2 Tom made this chair.

[「……は……された。」という過去の受け身の形の文に書きかえよ。]

ア This chair made by Tom.

イ This chair were made by Tom.

ウ This chair was made by Tom.

エ This were made chair by Tom.

オ This was made chair by Tom.

3 I found it under my desk.

[上の文が答えになる問いの文をつくれ。]

ア Where did you find the ball?

- イ Did you not find the ball under your desk?
 ウ When did you find the ball?
 エ Did you find the ball under your desk?
 オ Why did you find the ball?

分析的問題

次の四つの文を、それぞれ否定文にしてください。

- 1 He is an American boy.
- 2 I made a box yesterday.
- 3 He will go to Tokyo tomorrow.
- 4 She has finished her home work.

次の四つの文をそれぞれ問いの文にしてください。

- 1 He is kind.
- 2 He goes to school every day.
- 3 She can play the piano.
- 4 The house which stands over there is his.

次の四つの文をそれぞれ受身の文にしてください。

- 1 Jim wrote the letter.
- 2 People speak English in America.
- 3 Tom has broken the window.
- 4 You can read this book.

表 1 2 調査問題の応答分布

	ア	イ	ウ	エ	オ
過去の否定文	8	18	17	11	(46)
受身の文	9	5	(70)	4	11
疑問文	(34)	12	5	41	6

○印は正答

数字は応答率 (%)

表 1 3 分析的問題正答率

	1	2	3	4
否定文	82	32	67	69
疑問文	61	46	54	13
受身文	34	6	4	11

数字は正答率 (%)

調査問題では各五つの選択肢の内から一つの正解を選ぶもので $\frac{1}{5}$ の確率であった。分析的問題では実際に書かせたら、どのような結果が得られるか、はたしてどの程度まで、それぞれの事項が理解されているか、基本的なものから、複雑なものへ四つずつ問題をつくって解答してもらった。次に調査問題と

関連づけて、分析的問題を項目ごとに検討してみよう。

(1) 否定文の場合

調査問題の場合はShe wrote a letter last Sunday. の過去の否定文をつくるわけで、She did not write a letter last Sunday. が正答となる。ところが、did not writes がでたり、was not wrote がでたり、did not wrote がでたりしている。分析的問題の否定文の場合をみてみよう。

① He is an American boy.

答はHe is not (isn't) an American boy. で正答率は82%であった。

その他の応答は次のとおりである。

誤 答 文	誤答数	備 考
No, he isn't an American boy,	1	質問の意味を取り違えたらしい。
No, he isn't.	1	
Is he not an American boy?	1	
Is he an American boy.	2	does を誤って使っている。
He does not an American boy.	1	
He is an not American boy.	1	全然わかっていない。
He is an American boy?	2	
He was boy an American boy.	1	でたらめとしかいえないもの。
The it me boys a bomsgirl.	1	
American boy.	1	

② He made a box yesterday.

答は He did not (didn't) make a box yesterday. で正答率は32%で、調査問題の正答率46%に比し少なかった。

誤 答 文	誤答数	備 考
I did not made a box yesterday.	3	助動詞doを使った場合、次に原形不定詞がくることがじゅうぶんにわかっている。
No, I did not made a box yesterday.	1	
I did not a make box yesterday.	1	a の位置?
I don't make a box yesterday.	2	do の過去の形がはっきりわかっていない
I don't made a box yesterday.	7	do. を使っていないながら、使い方をよく心得ていない。
I did meak a box yesterday.	1	make をmeakと思っているらしい
I made not (a) box yesterday.	28	be 動詞や助動詞の場合と同じに考えている。

誤 答 文	誤答数	備 考
I made (med) a not box yesterday.	5	全然わかっていない。
I made a box yesterday.	2	
Are you made a box yesterday.	1	
I made was the box.	1	
I not made a box yesterday.	1	
I made do not a box.	1	本動詞の前に not をおくものと理解しているのであろう。
I made did not a box.	1	
		} do の使い方をよく理解していない。

③ He will go to Tokyo tomorrow.

答は He will not (won't) go to Tokyo tomorrow. で正答率は 67% であった。

誤 答 文	誤答数	備 考
No, he will not go to Tokyo tomorrow.	1	質問の意味の取りちがえか。
He will not be go to Tokyo tomorrow.	1	be を使っている。
Will he not go to Tokyo tomorrow.	1	
He will be not go to Tokyo tomorrow.	1	be を使っている。
He will go not to Tokyo tomorrow.	1	not の位置がわかっていない。
He will go to not Tokyo tomorrow.	2	
He not will go to Tokyo tomorrow.	1	
He doesn't will go to Tokyo tomorrow.	3	will が助動詞であることがわかっていないと思われる。do を使っている。
He don't will go to Tokyo tomorrow.	1	
He didn't will go to Tokyo tomorrow.	1	
He hasn't go to Tokyo tomorrow.	1	全然わかっていない。
This is will Tokyo tomorrow.	1	
He will go to Tokyo tomorrow.	1	

誤 答 文	誤答数	備 考
Will he go to Tokyo tomorrow.	1	全然わかっていない。
Will go to Tokyo tomorrow.	1	
He was to will go to Tokyo tomorrow.	1	

④ She has finished her home work.

答は She has not finished her home work. で正答率は69%であった。

誤 答 文	誤答数	備 考
She has not finished her home work ?	1	なぜ「？」をつけたのだろうか。
She hasn't finish her home work.	1	現在完了形が完全にわかっていない。
She have not finish her home work.	1	
She has finished not her home work.	1	
Has she not finished her home work.	1	not の位置がわかっていない。
She doesn't has finishhed her home work.	1	語順ちがい。
She doesn't have fjnished her home work.	6	
She djd n' t has finished her home work.	3	
She didn't have finished her home work.	1	She does not have a book. 等のいい方の影響か。
No, she didn't finish her home work.	1	
Has she finished her home work.	2	
She have finished her home work.	1	質問の意味のとりちがいか。
She has finished her home work.	1	
It wish staubs tomorrow.	1	

この四つの問題をとおして、考えてみると次のことがはっきりしてきた。

- o 四つ全部できたものわずか16%。しかもこのうち調査問題もできているものは14%であった。これらのものは、否定構文を確実につかんでいるといってもよいであろう。
- o 三つできたもの51%をさらにこまかく分析してみると、is not, will not, has not の三つができたもの38%, is not, will not, did not のできたもの7%, is not, has not, did not のできたもの4%, will not, has not, did not のできているものが2%であった。これから判断すると did not 構文が生徒にとってかなりむずかしいことがわかる。
- o 二つできたものの数は15%で、is not, has not しかできていないもの8%, is not, will not しかできていないもの4%, will not, has not しかできていないもの1%, is not, did not しかできていないもの2%という結果がでた。
- o 一つしかできなかったものは2%であるが、ともにis not しかできていない。

こうしてみると、各正答率からも判断できるのであるが、did not 構文をつかんでいるものは他の否定構文もだいたい確実につかんでいる。また練習量が多い is not ができがよいことは当然予測できることであるが、じゅうぶんな drill の必要性を改めて痛感させられる。この did not 構文も、もし do not 構文であつたらもっと正答者がふえていたかもしれない。それにしても substitution などを利用して do をつかう否定構文の作り方をもっと徹底的に練習することが望まれる。それから現在完了形に do をつかったものがかかなり見られたが、これも have 動詞否定形をつくるときは特にアメリカ英語ではdoをつかうが、その影響であろうか。じゅうぶんに注意を要するものである。

(2) 受身構文の場合

調査問題では Tom made this chair. を受身文にかえるのであるが、This chair was made by Tom. が正答で、正答率は70%であった。実際書かせた分析的問題の結果は次のようになっている。

① Jim wrote the letter.

答は The letter was written by Jim. であり、正答率は34%であった。なお、調査問題の正答率は70%であった。

誤 答 文	誤答数	備 考
The letter was writen by Jim.	4	受身構文はわかっていると思われる。 write の活用をよく理解していない ための誤りか。
The letter was witten by Jim.	1	
The letter was wroted by Jim.	2	
The letter was wrote by Jjm.	6	
The letter was wrotten by Jim.	3	
The letter was wroting by Jim.	1	
The letter was wrote buy Jim.	1	時制の誤り。
The letter is written by Jim.	2	

誤 答 文	誤答数	備 考
The letter is writen by Jim.	2	時制の誤りと、write の活用が十分に身についていないための誤りと思われる。
The letter is wrote by Jim.	4	
The letter was Jim wrote.	3	
The letter Jim wrote.	2	
Wrote Jim the letter.	1	
Jim wrote the letter.	1	
The letter Jim wrote.	1	
The letter is Jim wrote.	1	
Jim will wrote the letter.	1	
Letter wrote the Jim.	1	
He wrote the letter.	1	
Wrote the letter Jim.	1	
Wrote the Jim letter.	1	
Jim the wrote letter.	1	
The letter writen by Jim.	1	
The letter writeen by Jim.	1	
The letter wroten by Jim.	1	でたために近い。受身文は全然わかっていない。
The letter wrote by Jim.	1	
The letter write by Jim.	1	
		受身文ではby～構文を使うという所だけ理解しているための誤答であろうか。

調査問題と同じ型の問題であるが、正答率は34%と、調査問題の正答率70%に比較して、かなり低い成績となった。しかし write の活用をよく知らないで誤答したと思われるものが18%、さらに時制の点で誤ったもの8%となっており、これらはいずれも受身構文はわかっているのではないかと思われ、その数を加えると60%となる。それにしてもよく使われる不規則動詞の活用くらいはしっかり覚えておいてほしいものである。

② People speak English in America.

答は English is spoken in America. であって、正答率わずか6%であった。もっともby people, by them を省略しなかったものがそれぞれ10%、1%とあり、又by people of America としたものが1%あり、これらは正答あるいはそれに近いものと見なしでよいであろう。それにしても、それらを加えても18%にしかならず、①に比較して、少し複雑になると腰くだけになるよい例であろう。じゅうぶんなドリルをしてほしいものである。

誤 答 文	誤答数	備 考
English is spoken by people in America.	7	by people, by them を省略していないが、正答とみなしてよいと思う。

誤 答 文	誤答数	備 考
English is spoken by them in America.	1	
English is spoken in America by people.	3	少しぎこちないが、正答に近いもの。
English is spoken by people of America.	1	by 以下に問題があろう。
English were spoken in America.	1	どうして were にしたものか。
English was spoken in America by people.	1	
English was speak by American people.	1	
English is speaked in America.	1	speak の活用をしらない。
English is spoken by America people.	1	} by 以下に問題がある。
English is spoken by America.	1	
English is speaked in America by people.	1	
English is spoken people in America.	1	
English is spoakn in America by people.	1	
English are spoken in America by people.	1	
English is speakn in America by people.	1	
English is spoken America.	1	in がおちている。
English is spoken.	1	
English is spoken by in America people.	1	
In America was spoke English by people.	1	
America was wrote be Jim.	1	
In America is spaukn English by people.	1	
In America is spoken English by people.	1	

誤 答 文	誤答数	備 考
In America is spok English.	1	In America を主語と考えたものか。
In America is sporken English by people.	1	
English in America is sporken by people.	1	
In America is speaken English by people.	3	
English in America is speak people.	1	
In America is speak English by the people.	1	
In America is spork English by people.	1	
In America is spoken English.	1	
In America is spoak English by people.	1	
English is speake in America by people.	1	
In America was sporken by people.	1	
In America is speak English by people.	1	
In America spokn by people.	1	
Thy are spoken English in America.	1	
We are speaken English in America.	1	
English in America people speak.	1	
English speaken by America people.	1	
In America people speak English.	1	
Speak people English in America.	1	

以下は受身構文そのものが全然わかっていない。その意識さえもないものといえようか。

誤答文	誤答数	備考
People speak English in America.	1	
Speak english in people by in America.	1	
English in America people speak.	1	
The English spoken in American.	1	
America speak English by people.	1	
In America people speak English.	1	
America is people the speak English.	1	
People shall speak English in America.	1	
Speak English in America people.	1	
People speaks English in America.	1	
America people speak English.	1	

こうして誤答をあげてみると、正答を含めて約50%くらいのものが、受身構文とは、「主語（あるいは主語らしきもの）+ be動詞+過去分詞（あるいは過去分詞らしきもの）+ by～」と理解しているように見える。ここで「主語らしきもの」とか「過去分詞らしきもの」といったのは、In America が主語のつもりで文頭に出されたものがかなりみられ、また speak の活用というか過去分詞形が多種多様だからであるが、In America を文頭に書くのは、能動態の文を受身文にかえるとき、とにかく能動態の文のいちばんあとにあるものを受身分の主語にして、あとは動詞を be + p.p. の形にして、能動態の文の主語を by のうしろにもってくればよいと、あまりにも機械的にうのみにして練習しているからではないだろうか。もしそうだとすれば pattern practice の際に文の構造理解にもう少し注意を払う必要がある。「英語専攻の大学生に、ある英文を訳させたところ、代名詞はそれぞれ『彼らは』とか『彼に』とか『それは』とやって、日本語を見ると満点に近い答案を書いてくれたが、同じ問題説明として文中の it は何をさすか指摘せよという問題では、全然できていなかったが、この学生は英語がわかっているとしたらいいものか。それにしても高校ではよくここまで教育したものだ」と大学の先生に皮肉られたのが思い出される。もちろんこの学生はわかっているとはいえないわけである。大学受験生を見ていてもそうであるが、受験という重圧のためか、自分の知っているあらゆる文法知識を使って英文を日本語に訳すが、さて、この文は何をいっているのかときくと、訳しておきながらわかりませんと答える生徒が意外に多い。これらはほんとうに英語構造がわかっているとはいえないのである。英語教育にあたって大いに注意せねばならないことである。

③ Tom has broken the window.

答は The window has been broken by Tom. であって、正答率はわずか4%

あった。has be broken, is had broken, is has broken, is broken was broken あるいはそれに近い誤答がみられたが、皆腰くだけに終わっている。

誤	答	文	誤答数	備	考
		The window has be broken by Tom.	3	}	been までいっていない。be でとまっていた。次の can の場合などと混同したのだろうか。
		The window had be broken by Tom.	1		
		The window is had broke by Tom.	1		
		The window is had broken by Tom.	1		
		The window was had broken by Tom.	1	}	完了形の受身形は be 動詞と have 動詞と過去分詞を結ぶものと考えたものであろう。
		The broken window is had by Tom.	1		
		The window has broken be Tom.	1		
		The window is has broken by Tom.	3		
		The window was has broken be Tom.	1		
		The window was broken has by Tom.	2		
		The window was broke has by the Tom.	1		
		The window was Tom has broken.	1		
		The window was broken by Tom has.	4		
		The window is broken by Tom has.	2		
		The window was broken by Tom.	8	}	完了形の受身形にならず、ふつうの現在又は過去の受身形となっている。
		The window is broken by Tom.	6		
		He window was broken by Tom.	1	}	完了の受身形が作れず、完了形だけにとどまってしまった。
		The window had broken by Tom.	6		
		The window has broken by Tom.	12		
		The window has broken be Tom.	1		

誤 答 文	誤答数	備 考
Tom was broken by the window.	1	以下は受身構文が全然わかっていない。
The window Tom has broken.	3	
The window will broken by Tom.	1	
The window had broken by Tom.	1	
The window his broken buy Tom.	1	
Window was brok by Tom.	1	
Window has broken the Tom.	1	
Tom will has broken the window.	1	
Tom broken has the window.	1	
Tom has broken the windowy.	1	
Tom has broked the window.	1	
He has broken the window.	1	

助動詞+be+p.p. の形と have+been+p.p. の形はしっかりと区別されねばならない。
この完了形の受身はできがよいことは予想していたが、もう少しよくてもよかったのではないか。

④ You can read this book.

正答はThis book can be read by you. で正答率は11%であった。is can read, was can read などの誤答がみられる。

誤 答 文	誤答数	備 考
This book can be read.	1	正解とみなしてよいであろう。 以下はわかっていないが、 be 動詞をつかって、何とか受身形をつくろうと苦心しているようすがうかがわれる。 それにしても can, be, read の結びつきは全然わかっていない。 以下は全然わかっていない。
This book is can read by you.	3	
This book was can read by you.	2	
This book be can read by you.	1	
This book were could read by your.	1	
This book is could read by you.	1	
This book can be is read by you.	1	
This book can was read by your.	1	
This book can read by you.	8	
This book can read by your.	3	
This book you can read.	4	
This book could read by you.	1	
This book can read be you.	1	

誤 答 文	誤答数	備 考
This book can readen by you.	1	
This book can read by me.	1	
This book is able to read by you.	2	
This book is abell to read by you.	1	
This book is abul to read by you.	1	
This book read can by the you.	1	
This book will can read by you.	1	
This book is read by can you.	1	
This book was read by you can.	1	
This book were read by your can.	1	
This book were read by you.	1	
This book was read by you.	1	
This book is read by you can.	3	
This book is read by you.	5	
This book is read you.	1	
This book was.	1	
He read this book.	1	
You can read this book.	1	
You can read thy book.	1	
You will can read this book.	1	
You was can read this book.	1	
You can this book is read by you.	1	
You can book read this book.	1	
Can read this book?	1	

四つの問題と調査問題との関係を考えてみると次のようなことがみられる。

- 調査問題ができたもの70%のうち、分析的問題が三つできたものわずかに6%、二つのもの10%、一つのもの17%、一つもできなかったもの37%であった。
- 調査問題ができなかったもので一つでも分析問題ができたものわずかに2%、あとは一つもできていない。
- The letter was written by Jim. だけできたもの19%。しかもこれが一つ

できたものの全員である。いいかえるとこれができていないものは、他のものも全然できていないのである。

- o 二つできたもののうちで、The letter was written by Jim. と This book can be read. のできたもの5%。
- o 二つできたもののうちで、The letter was written by Jim. と English is spoken in America. のできたもの3%。
- o 二つできたもののうちで、English is spoken in America. と This book can be read by you. のできたもの1%。
- o 三つできたもののうちで The letter was written by Jim. と The window has been broken by Tom. および This book can be read のできたもの4%。The letter was written by Jim. と English is spoken in America. と This book can be read by you. のできたもの20%で、他の組み合わせは0であった。
- o 四つ全部できたものはいない。

こうしてみると受身構文は意外な程わかっていない。substitution なり, transformation の原理を利用してもっと徹底させなければならない。

(3) 疑問文の場合

調査問題の場合は I found it under my desk. を答えとするような疑問文を選ぶもので、Where did you find the ball? が正答で、34%であった。他に Did you find the ball under your desk? が41%、Did you not find the ball under your desk? の誤答が12%となった。これらの誤答は under your desk の所にひかれて、同じものを選んだもの、いいかえれば文がつかめていないで、適当に答えたと思われる。それにしてもこれらの質問に対する答えの場合は必ず Yes か No がつくことをもっとよく理解してよいはずである。もう少し指導にくふうをこらして、徹底をさせなければならない。

分析的問題を検討すると、調査問題が疑問詞を使う特殊疑問文であったが、分析的問題では、はたして一般疑問文の場合、どの程度まで理解されているかを知るために普通疑問文をつくらせてみた。長い修飾語句の場合もどの程度理解されているかなどを見るために少しむずかしいものもいれてみたわけである。

① He is kind.

正答は Is he kind ? である。正答率は61%と意外に少なかった。こういう形は中学1年のとき、He is a teacher. Is he teacher ? などの練習をとおして、徹底されているものと思ったが、案外であった。

誤 答 文	誤答数	備 考
is he kind ?	1	文頭を大文字にすることを忘れてい る。
Is he a kind ?	1	

誤 答 文	誤答数	備 考
Is it kind ?	1	
Are you kind ?	1	
Does he is kind ?	1	be 動詞も一般動詞と同じに考えて いるものと思われる。
Das he is kind ?	1	
Does he kind ?	6	
Did he was kindly.	1	
He is an kind.	1	
He is kind too ?	1	
He is an the kind.	1	
Who is kind ?	1	
Who kind ?	1	質問の意味を取りちがえたものか。
What is he ?	1	

② He goes to school every day.

正答は Does he go to school every day ? で正答率は46%である。誤答に Does he goes ~ ? や Goes he ~ ? が多く見えるが、goes の -es をはずすことを理解していなかったり、或いは忘れてしまったものであろう。また、Goes he ~ ? はbe動詞、又 can 等の助動詞の場合と同じに考えたものであろうか。もっともっと徹底させる必要がある。

誤 答 文	誤答数	備 考
does he go to school every day?	1	文頭を大文字にすることを忘れている。
Dose he go to school every day?	1	does のつづりが誤っている。
Does he goes to school every day?	9	goes に -es をつけたままと なっている。
Dose he goes to school every day?	1	
Das he goes to school every day?	1	
Did he go to school every day?	2	問題の意味を取りちがえたものか。
Does he to school every day?	1	
Goes he to school every day?	5	be 動詞と can 等の場合と同じ と考えたものか。
Was he went to school?	1	
Was chool every day?	1	
He goes every day to school?	1	
He go to school every day.	1	

誤 答 文	誤答数	備 考
He is go to the school every day.	1	問題の意味を取りちがえているものか。
He goes to school every day.	1	
Where does he go to every day?	1	
Where does he go every day?	1	
What does she do every day?	1	
When does he go to school?	1	
When is he go to school?	1	
Where is he go every?	1	
Where he goes every day?	1	

③ She can play the piano.

正答はCan she play the piano? で正答率は54%であった。can の場合も be 動詞の場合と同じくもっと正答数が多いことを期待していたのであるが期待はずれであった。一年の時のドリル徹底がじゅうぶんでなかったものか。

誤 答 文	誤答数	備 考
Is the able to play the piano?	1	これは正答とみなしてよいものであるがcanをつかっていなかったの でここにいれたもの。
Does she can play the piano?	13	
Dose she can play the piano?	1	can が助動詞ということが理解 できていないものと思われる。
Das she can play the piano?	1	
Is the can play the piano?	1	
She can play on the piano.	1	
The piano she can play too?	1	問題の意味をとりちがえているものか。
Who can play tennis?	1	
What can she play?	4	
What can she do?	1	
Who can she?	1	
What play she can?	1	

④ The house which stands over there is his.

正答は Is the house which stands over there his? で正答率は13%であった。修飾構造が理解できているかどうかを見るために出した問題である。関係代名詞構文は日本語にないためか、生徒にはわかりにくいものとなっている。それにしてもわずか13%は心細

い。関係代名詞による修飾構造がわかれば、機械的に操作のできる問題である。それができていないということは関係代名詞構文の理解がじゅうぶんでないといえよう。指導法にくふうをこらして徹底をはかってほしいものである。

誤 答 文	誤答数	備 考
Is the house which stands over his?	1	there の処置を忘れたものであろう。
Is the house wich stands over there is his?	2	修飾構造はわかっているのではないか。
Is the house stands overe is his?	1	
Is this the house which stands over there?	1	構文をかえてしまっている。
Is he the house which stands over there?	2	
Is there his the house which stands over?	1	over there ではなくて there is と理解していたものと思われる。
Is there the house which stands over his?	1	
Does the house which stands over there is his?	4	Do を用いているもの。疑問文は全部 do を用いればよいと考えているので あろうか。
Does the house which stand over there is his?	2	
Does house which stands over there is his?	1	
Do the house which stands over is his?	2	
Do the house which stand over there is his?	1	
The house which does stand over there is his?	1	
The house which stand over there is his?	1	
The house which stand over there is his?	1	
The house which stand over there is his.	1	

誤 答 文	誤答数	備 考
There is house which stands the over.	1	Which を関係代名詞でなくて、疑問代名詞と考えているものと思われる。
Which the house stands over there is his?	7	
Which the house stand over there is his?	1	
Which the house stand overe there is his?	1	
Which house the stands over there is his?	1	
Whoes the house which stands overe there is his?	1	
Whoes the house that stand over there?	1	
Whoes house which stand over there?	1	
Who the house which stands over there?	1	
What house which stands over there is his?	1	
Where is his house?	1	問題の意味の取りちがえか。
Where does stand the house?	1	
Is the ...	1	

四つの問題をとおしてみると次のようなことがいえる。

- 四つできたもの 8%
- 三つできたもの 23%のうち、Is he kind? と Does he go to school every day? と Can she play the piano? のできたもの 17%。 Is he kind? と Can he play the piano? と Is the house which stands over there his? のできたもの 4%。 Is he kind? と Does he go to school every day? と Is the house which stands over there his? のできたもの 2%。その他の組合わせは 0。
- 二つできたもの 31%のうち、Is he kind? と Can he play the piano? のできたもの 14%。 Is he kind? と Does he go to school everyday? のできたもの 9%。 Can he play the piano? と Does he go to school

every day? のできたもの8%。他の組合わせは0。

- o 一つできたもの12%のうち、Is he kind? だけでできたもの8%。Does he go to school every day? または Can he play the piano? だけでできたものそれぞれ2%であった。

疑問文の作り方については Is he kind? や Can he play the piano? や Does he go to school every day? については、一年から三年までの間にじゅうぶんどリルをつんで、少なくとも70%から80%、多ければ90%くらいの正答率を得られるものと思っていたが完全に期待を裏切られた形となった。このことは否定構文にもいえることである。

もっともっとドリルが必要である。

英語の場合には、新しい構造言語学等の影響が流れはじめているが、やはりドリルが一番たいせつではないだろうか。もちろん中学生ともなれば、単なる口まねだけでなく、理解の上に立ったドリルが必要である。そのためにもI-C分析や transformation theory は役に立つであろう。たとえば従来われわれが、a very big stone house の very は big にかかるのかいってばく然と説明してきたものを、I-C分析で図解してみせれば、生徒の理解も早いであろう。また「ほとんどすべての文は少数の kernel sentence に transformation という一連の操作を加えて作られる。」とする transformational grammar も文の理解を助け、また文をつくる事をも大いに助けてくれる。たとえば "Did the old man kick the old dog?" の場合、"The man was old." と "The man kicked the dog." と "The dog was old." という三つの kernel sentences をもとにして、まず nominalization と conjoining という操作を加えて、"The man was old." と "The dog was old." をそれぞれ "the old man" "the old dog" とし、"The old man kicked the old dog." なる文をつくり、次いで、question transformation という操作を加えて、"Did the old man kick the old dog?" の文をつくるということになる。この過程はいつも kernel sentence にもどって順序をおって文を拡充していくのであるから、たえず復習を含むことになり、理解力と文をつくる力を増すのに大いに役に立つ。その他構造言語学がわれわれにもたらしてくれた function words の働きについての明解な理解、また音声面では minimal pairs technique が非常に役に立つ。その他 contrast の考え方等も大いに有用である。これらの言語学界がわれわれに与えてくれたものを大いに利用していくべきであろう。そして話はもとにもどるがドリルを通して生徒が無意識に response できるまで、徹底をはかることが大切である。

(執筆者 県立新潟東工業高校教諭 渡辺昌夫)

あ と が き

ここにまとめたものは、全国学力調査の結果を学習指導の改善に具体的に役だてることを目的としているが、当研究所で主力を注いでいる「学力と学習指導に関する第1次5か年計画の研究に続く第2次3か年計画の研究」に関連して研究を進めたものであり、その分析の方法や結果の集計法等については、まだまだ考慮しなければならない未熟な点がある。そのため、ここに示されたものは、事例的な研究に終わったことは否めないが、何らかのかたちで、今後の学習指導に役だつところがあれば幸いである。

この研究の全体の構想については全所員でいくたびか研究協議して企画した。各教科の執筆責任者は次のとおりである。

序説—新貝靖宏，国語—大竹大三，社会—南場毅，算数・数学—片桐安治，理科—野沢弘・渡部宇威智（以上 新潟県立教育研究所員），英語—渡辺昌夫（新潟県立新潟東工業高校教諭）